大谷大学蔵『衆経要集金蔵論』考

――巻第二の問題を中心に――

本井牧子

（一）はじめに

本学博物館には『衆経要集金蔵論』（以下『金蔵論』と略称）と題される写本が蔵されている（余甲一六〇）。山田文昭氏の旧蔵にかかる本書は、末尾に「長承三年甲寅正月四日一見了法隆寺〔墨消〕／為令法久住利益人天也」という奥書をもつ。この奥書は本文とは別筆であるが、長承三年（一一三四）という年紀は、法隆寺一切経の書写時期と近いことも注目されている。残念ながら完本ではなく巻一と巻二のみの零本であるが、『金蔵論』の完本は現存しておらず、序文を含むという意味でも貴重な本文を伝える本である。

『金蔵論』は北斉から北周にかけて活躍した釈道紀なる人物の撰になる。[1]『金蔵論』序文によれば、北周の武帝の廃仏を契機に、道俗の教化を目的として編まれたものという。

この『金蔵論』が注目されたのは、主に国文学の分野であった。それは『金蔵論』が『今昔物語集』天竺部の出典

の一つと目されたことによる。例えば今野達氏校注の岩波新日本古典文学大系では『金蔵論』出典説が全面的に採用されている。しかし、仏教学や歴史学の分野からはあまり注目されてこなかったといってよい。その大きな原因の一つとして、『金蔵論』が早く中国では散逸してしまい、日本に一部分が伝存するのみであるというその残存状況をあげることができる。これまで『金蔵論』研究は、本学蔵の巻一・二（谷大本と略称）と、興福寺蔵国宝『日本霊異記』紙背に書かれた巻六（興福寺本と略称）によるほかなかったのである。

ところが、近年この『金蔵論』に関してたてつづけに論考や発表がなされるなど、注目が高まっている。特に荒見泰史氏により敦煌にも『金蔵論』が伝存することが報告され[2]、これによって『金蔵論』研究は飛躍的に進むこととなった。本稿は『金蔵論』の基礎的な研究の第一歩として、主に谷大本巻二の問題を、先行研究に導かれながら、新出の敦煌本とも関連させて検討することを目的とするものである。

（二）谷大本『金蔵論』

まず、谷大本『金蔵論』巻二の問題を明らかにするために、形式的な面から検討を加えたい。谷大本の構成を示すと以下の通りである。説話番号は私に付したものである。

巻	縁		説話標題
一	邪見縁第一	述意部	序文
		①	迦葉為婢肆王説邪見過悪譬喩縁
		②	須達家老婢過去起邪見得悪報縁
		③	邪見毀滅三宝得悪報縁

一見して気がつくのは、巻一と巻二で形式が異なるということである。巻一では表の二段目に示したように「邪見縁第一」「殺害縁第二」という章題が付されているのに対して、巻二には章

殺害縁第二

① 釈種過去殺魚今為流離王所滅縁
② 迦留陀夷等過去殺羊得悪報縁
③ 毘舎離三十二子過去牛殺得悪報縁
④ 微妙過去妬殺小婦子得悪報縁
⑤ 宿大哆過去殺辟支仏得悪報縁
⑥ 師質過去斫辟支仏臂得悪報縁
⑦ 駒那羅過去壊鹿眼得悪報縁

二

① 好信王発欲灌仏縁
② 国王夫人与一賢者共造寺縁
③ 以檮衣石布施人起塔生天縁
④ 有人路行過見三受身行進縁
⑤ 優婆塞持戒鬼代花縁
⑥ 難陀燃灯声聞神力不能滅縁
⑦ 梵志諸施比丘説一偈能消縁
⑧ 梵志遠学値五無反復縁
⑨ 梵志兄弟四人同日命終縁
⑩ 長生太子欲報父怨後還得恩縁
⑪ 為国王身治梵志罪縁
⑫ 優填王造牛頭栴檀像縁
⑬ 優填王造金像縁
⑭ 波斯匿王造牛頭栴檀像縁
⑮ 阿那律等共仏跋提長者及其婦縁
⑯ 目連為母造盆縁
⑰ 童子迦葉従尼所産一歳成道縁
⑱ 願足羅漢化餓鬼説法昔悪口縁

題はみられず、単に説話が列挙されるという形になっている。

さらに、谷大本巻一をみると、章題が付されているのみならず、章の冒頭にその章の内容を象徴する短い文章が付されている（便宜的に各章冒頭のこの部分を「述意部」と呼ぶ）。例えば、邪見縁第一の冒頭には以下のような文章が付されている。

如仏経説。愚痴之人、不識因果、妄赴邪見。謗无三寶四諦无施无祠、乃至无善无悪、无善悪業報、无今世无後世、无衆生受生。如是破善悪人、名断善根。決定當堕阿鼻地獄。

この部分では章題である「邪見」の具体的な様相が述べられており、次に続く説話への導入の役割を果たしていると考えられる。

⑲	四比丘説苦遇仏得道縁
⑳	比丘自恣受臈得道縁
㉑	仏楽宿習得道縁
㉒	比丘久病仏為浴浣縁
㉓	道人度猟師縁
㉔	調達与仏結怨之始縁
㉕	暴志比丘尼前身為鷲婦縁

このように、谷大本『金蔵論』は巻一と巻二で、章題や述意部の有無という形式的な違いがある。確かに、巻二の説話内容をみてみると、章題は付されていないものの、ある程度共通性をもった説話がまとめて引かれているとはいえよう。とはいえ、それは巻を通じて一貫するものではなく、また登場人物による分類というのは、巻一の分類とは位相を異にする。以上のように、谷大本『金蔵論』は巻一と巻二で形式を異にするものであるといえる。

例えば④から⑥までは優婆塞の話であり、⑦から⑨までは梵志の話である。

（三）『金蔵論』巻五・巻六――新出の敦煌本を中心に――

ここで、谷大本以外の形式をみてみたい。『金蔵論』の現存本としては、谷大本と同系統の写本[3]の他に、興福寺本（巻六）が知られるのみであった。ところが、最近になって荒見泰史氏により、敦煌にも『金蔵論』写本が数点残っていることが報告された[4]。この貴重な指摘に導かれ、さらなる写本の探索を進めたところ、新たに数点の『金蔵論』敦煌写本を見いだすことができた。以下がこれまでに判明した敦煌本『金蔵論』写本の一覧である[5]。【　】に該当する巻を示すが、いずれも完本ではなく残欠本である。このうち、北京一三二二・俄蔵Дx〇〇九七七・北京大学D一五六の三本は、もともとひとつづきのものであったと考えられるため、敦煌本Aとして一括して扱う。

・敦煌本A……北京一三二二・俄蔵Дx〇〇九七七・北京大学D一五六【巻五・六】

・敦煌本B……北京八四〇七【巻五】
・敦煌本C……スタイン三九六二【巻五】
・敦煌本D……スタイン四六五四【巻六】
・敦煌本E……ペリオ三四二六【不明】
・敦煌本F……スタイン七七九（逸文）【不明】

敦煌本AからDまでは、首題・尾題、あるいは興福寺本との対照により、『金蔵論』の巻五あるいは巻六であると判断できるものである。[6] 敦煌本EとFに関しては、題記や対照すべき写本が存在しないため検討が必要であり、そういう意味でAからDと同列に示すべきものではない。しかし、後から検討する通り、Eは巻数不明の残欠本、Fは『金蔵論』の逸文を含むと推定されるものであるため、便宜的にここに含めた。

このうち敦煌本Aは、巻五の冒頭部分と三本の分断部に若干の欠落があるとはいえ、巻五・六の全体をほぼ伝える貴重な本である。特にこれまで全く知られていなかった巻五の全容がほぼ明らかになったことは、『金蔵論』研究において特筆すべきことといってよい。敦煌本AからDに、興福寺本をあわせて読むことで、巻五・巻六の全体像を概観することが可能になったといえる。

さて、ここで巻五・巻六の形式をみてみたい。実は、興福寺本には「―縁」という章題が見られない。しかし、説話内容から、ある意識によって配列されていることが明らかであり、本来は章に分かれていたであろうことが推測された。果たして敦煌本巻五・巻六にはその推測通りの章題が付されているのである。その章題は以下の通りである。巻五の巻頭に置かれた章は章題部分を欠くため、推定されるものを（ ）で括って示した。

巻五……（塔縁第十五）・像縁第十六・香花縁第十七・燈縁第十八

巻六……幡蓋縁第十九・出家縁第廿・袈裟縁第廿一・孝養縁第廿二

また、興福寺本では孝養縁第廿二に述意部がみられるが、敦煌本では袈裟縁第廿一にも述意部がみられる。

大悲経説、但使性是沙門、行自称沙門、形似沙門被著袈裟、於弥勒仏乃至樓至仏所、得入涅槃、无有遺余。(7)

この述意部はすべての章段にみられるわけではなく、また本によってもたない本もあるなど、敦煌本の中でもゆれがある。とはいえ、それぞれの章段の内容を象徴する役割をはたしており、明確な編纂意識のもとに配されていることをうかがわせる。

このように見てくると、『金蔵論』巻五・六は、形式の点で谷大本巻一とよく一致する。そしてそれは逆に巻二の異質性を浮かび上がらせることになる。

ここで、章題や述意部の有無という問題を考えてみたい。そこで手がかりになるのが、『金蔵論』序文と、『続高僧伝』釈道紀伝の記述である。まずは序文の『金蔵論』撰述に関わる部分を引用する。

且沙京都漢中之経、少歴、歎教門豊、広写習難。周簡摘要言、撰為約引、集成七巻、別為異部。乃是衆経之精、題号金蔵論。師善模音軌、字等彫金。巧布篇章、言齊鏤玉。（中略）都合今九巻、有二十四章、有百九十二條。(8)

傍線部によると、『金蔵論』は仏典の「要言」を拾い出し、要約して引用し、七巻に集成したものだという。続く「別為異部」は解釈が難しいが、あるいは部（章）を立てて分類したということであろうか。さらに、「巧布篇章」と道紀による「篇章」の配列が巧みであったと記されていることから、『金蔵論』には「篇章」が立てられていたことがわかる。それは「今九巻、有二十四章、有百九十二條」とある部分とも対応する。つまり、序文によれば『金蔵論』は二十四の章段に分かれていたということになるのである。

また、『続高僧伝』道紀伝にも同様のことが書かれている。

広読経論、為彼士俗而行開化。故其撰集名為金蔵論也。一帙七巻、以類相従。寺塔幡燈之由、経像帰戒之本、具羅一化、大啓福門。[9]

傍線部の「以類相従」は『経律異相』の序文にも「経律要事、皆使以類相従、令覧者易了」[10]とみえ、分「類」して配列することと考えられる。このように、序文や『続高僧伝』からは、『金蔵論』は、単に説話を列挙するのではなく、ある「部（章）」を立て、「類」ごとに配列したものであると考えることができる。

このようにみてくると、谷大本『金蔵論』巻一、そして敦煌本の巻五・巻六の形式は、序文のいう「巧布篇章」、「二十四章」、あるいは『続高僧伝』の「以類相従」によく符号する。逆にいえば、章題や述意部をもたない谷大本巻二は、形式の面で違和感を感じさせる巻であるということになろう。

（四）『経律異相』・『法苑珠林』との比較

谷大本巻二の異質性は、本文を『経律異相』・『法苑珠林』と比較することでよりはっきりしてくる。『金蔵論』所収話には、『法苑珠林』との同文的同話が多く存在する。[11]ところが、巻二に関しては、『法苑珠林』との同文的同話は皆無で、全てが『経律異相』との同文的同話なのである（『衆経要集金蔵論』同話一覧参照、以下「同話一覧」と略称）。

巻一・五・六には、『経律異相』との同文的同話は全く見られない。例えば巻五 香花縁第十七 花天過去以一花散僧得報縁④のように、『法苑珠林』に同文的同話がなく、『経律異相』に同話がある場合でも、本文の系統は異なるのである。以下、『金蔵論』本文と『経律異相』、さらに出典の『賢愚経』の冒頭部を対照して示す。

金蔵論	経律異相[12]	賢愚経[13]
昔仏在世時、舎衛城中有一長者、生一男。面貌端政、世所希有。其児生時、家中自然天雨衆花、積満舎内。父母見已、生歓喜无量、因為立字、名曰花天。年漸長大、往至仏、礼拝問訊、即請仏詣家。	舎衛国有豪富長者、生一男兒。面首端正、天雨衆花、積満舎内。即字此兒、名弗把提（梁言花天）。兒年轉大、往至仏所。心自思惟、我出處世、得値聖尊。即前白仏言、唯願世尊、及与衆僧、明日屈意、臨適鄙家、受少蔬食。仏即受請。	如是我聞。一時仏在舎衛国祇樹給孤獨園、与大比丘衆千二百五十人俱。爾時国内、有豪富長者、生一男兒。面首端政。其兒生已、家内自然天雨衆華、積満舎内。即字此兒、名弗波提婆。晉言花天。兒年轉大、往至仏所。見仏顔容相好無比、見已歓喜。心自思惟、我生處世、得値聖尊。今當請仏及諸衆僧。即前白仏言、唯願世尊、及与衆僧、明日屈意、臨適鄙家、受少蔬食。因見福慶仏知其根、即時受請。

『金蔵論』も『経律異相』も出典は『賢愚経』と明記しているが、実際に三者を比べると、『経律異相』の方が出典に忠実であり、『金蔵論』には若干独自の表現もみられることがわかる。このように、『金蔵論』が引く説話と『経律異相』が引く説話の本文は、同源であっても異系統に属するものなのである。しかし、谷大本『金蔵論』巻二をみると、全てが『経律異相』と同文的同話となっている。これは引用する説話の本文系統として他の巻と大きく異なるといえよう。

ところで、谷大本『金蔵論』巻二の異質性は、早く山路芳範氏によっても指摘されていた[14]。氏は『義楚六帖』に

「金蔵経云」として引用される記事と、『金蔵論』の対応話を明らかにした上で、「ただこの対応するものが、巻一、六掲載話であり、巻二に掲載される二十五話中からは見出せなかったことは何等かの意味をもつものかも知れない」と述べる。『義楚六帖』には巻二からの引用がみられないのである。氏のこの指摘は、敦煌本によって判明した説話が増えても、何らその有効性を失わない。敦煌本によって明らかになった巻五からは、七話が『義楚六帖』に引かれているのである（同話一覧）。巻一・五・六の高い引用率から考えて、『義楚六帖』が巻二からは一話も引用しなかったというのは、明らかに不自然であろう。

以上、形式、説話の本文系統、『義楚六帖』の引用の点から、谷大本『金蔵論』巻二が他の巻に比して異質であることを述べてきた。谷大本『金蔵論』巻二は、実は『金蔵論』ではないという可能性を考えねばならないであろう。

（五）敦煌本E

ここで、敦煌本Eに注目してみたい。敦煌本Eは以下の三話を収める。

①比丘財乞丐作福得報縁　出譬喩経略要

②四梵志避死得脱縁〔　〕

③厭三界五道受苦勧生浄土縁〔　〕

敦煌本Eは、題記を欠くが、①の「比丘財乞丐作福得報縁　出譬喩経略要」という説話標題と出典注記は、『金蔵論』諸本中最も多い「〈説話標題〉縁　出《出典》略要」という形式と一致する。[15] ②③に関しては出典注記の部分が破損しているが、破損部分の大きさから考えて、同様の注記があったと考えてよいであろう。また、①②に関しては『法苑珠林』に同文的同話があり、①は『義楚六帖』にも「持戒座禅」として引かれている（同

話一覧）。

以上のような理由から、敦煌本Eもまた『金蔵論』の残欠であると考えられる。しかし、敦煌本Eに関しては、巻数をうかがわせる資料が全くないため、それがはたして何巻目の何という章題のもとに収められていたのかは不明である。ここでは巻数などは不明であるが、『金蔵論』の一部として考えておきたい。

さて、ここで②の四梵志避死得脱縁をみてみたい。この話は、実は谷大本『金蔵論』巻二の第九話にも「梵士兄弟四人同日命終縁」として同話が収められているのである。以下、説話の冒頭部分について敦煌本E、法苑珠林、谷大本巻二、経律異相とを対照して示す。

敦煌本E	法苑珠林[16]	谷大本	経律異相[17]
昔有梵志兄弟四人。皆得吾通。自知命促七日必死。兄弟議〔　　〕神通自在。能以神力翻覆天地。現身極大手捫〔　　〕所不辯。寧當不能避此難也。	昔有梵志兄弟四人。皆得五通。自知命促七日必死。兄弟議曰、我等兄弟神通自在。能以神力翻覆天地。現極大手捫摸日月。移山住流無所不辨。寧當不能避此難也。	梵志兄弟四人。同日命終盡。自共議言、五通之力覆天地。手捫日月、移山注流。靡所不能。寧當不能避此死対。	梵志兄弟四人。各得五通。卻後七日皆當命盡。自共議言、五通之力反覆天地。手捫日月、移山住流。靡所不能。寧當不能避此死対。

敦煌本Eには破損部分が多く、判読不能箇所が多いとはいえ、『法苑珠林』との同文性は明らかである。それに対して、先に述べたように、谷大本『金蔵論』巻二所収話は『経律異相』と同文的同話である。敦煌本Eの出典注記は破損のため判読できないが、『法苑珠林』はこの説話を「出曜経云」として引いており、『出曜経』巻第二には同話が収められているので、出典は『出曜経』と考えてよい。[18] それに対して谷大本では「出法句経第二第三」、『経律異相』

では「出法句経第三巻」というように、『法句経』が出典として挙げられている。[19] このように、敦煌本Eと谷大本は同じ話を収めながら、出典も本文系統も異なるものを収めているのである。

例えば『法苑珠林』のように百巻という大部の類書になれば、同じ話が別の部分に再録されることもしばしばある。しかし、『金蔵論』のように七巻（あるいは九巻）という小規模なものの中に、系統は異なるとはいえ同じ話が二話収録されるということは、やはり不自然であろう。そう考えたとき、いずれが『金蔵論』に収録される本文としてふさわしいかといえば、他の巻の本文系統から考えて、やはり『法苑珠林』と同系統の本文をもつ敦煌本Eの方であろう。そして、それを重複して収める谷大本『金蔵論』巻二は『金蔵論』ではないという可能性がより高まったといえる。今後『金蔵論』の成立時の姿を考える上では、谷大本巻二は十分注意して扱う必要があろう。

（六）敦煌本F

谷大本巻二が『金蔵論』ではないとすると、本来『金蔵論』の巻二はどのようなものであったのであろうか。このことを考える際に興味深い資料が敦煌本Fである。スタイン七七九は様々な写本が継ぎ合わされているものであるが、注目したいのは、「諸経要略文」という題記のあと、様々な仏典からの引用を記し、その後説話を三話載せ、その後さらに仏典から文を引くという一連の部分である（この部分を敦煌本Fとする）。[20] そこには以下のような三話が引かれている。ここに引かれている三つの説話が『金蔵論』からの引用ではないかと考えられるのである。

①蛤聴法得生天縁　出善見律毘婆抄要略
②鳥聞比丘誦経得生天縁　出賢愚経
③鸚鵡聞説四諦得生天縁　賢愚経

まず、①の「蛤聴法得生天縁　出善見律毘婆抄要略」という説話標題をみてみる。先にも触れたとおり、『金蔵論』諸本では「〈説話標題〉縁　出《出典》略要」という標題形式が最も多い。①の標題は「要略」であり、「略要」との違いはあるものの、形式が近似する。また、この三話の内容をみてみると、①は仏の説法を聞いた蛤が、その功徳で死後忉利天に生まれたという話、②は比丘が経を読むのを聞いていた鳥が忉利天に転生したという話、③は須達長者の家の二羽の鸚鵡が、阿難の説法を聞き、天に生じたという話で、いずれも畜生が聞法の功徳で天に生まれるという話型で共通する。このことは、これらの三話が同じ主題のもとにまとめられていたものである可能性を示唆する。また、この三話はいずれも『法苑珠林』に同文的同話があり、本文系統としても他の『金蔵論』所収話と一致する。さらに、①③の説話は『義楚六帖』にも①「蛤宮乗殿」、③「鸚鵡聞法」として引かれている（同話一覧）。以上のことから、敦煌本Fの説話部分は、おそらくは近接して収められていた『金蔵論』の三話を引用したもの、つまり『金蔵論』の逸文であると考えてよいであろう。

ところで③の説話は、『今昔物語集』巻第三にも「須達長者家鸚鵡五第十二」として同話がみられる。この説話に関して今野達氏は、『義楚六帖』の記述からこの話が『金蔵論』に収録されていたと指摘する。さらに注目されるのは次の指摘である。

孔雀経音義・下に「衆経要集二巻云」として諸経要集と同文を引くのは、あるいは衆経要集金蔵論収載話かとも思われるが、現存本巻二には見えず、「衆経要集」は諸経要集の異称とも。[21]

『孔雀経音義』は、不空訳『仏母大孔雀明王経』の注釈書で、天暦四年（九五六）に成ったと考えられている。その巻下の「鸚鵡大山」に関する注の部分には、「衆経要集二巻云」として③の同話が引かれているのである。[22]

『孔雀経音義』のいう「衆経要集」は、確かに今野氏の指摘どおり『諸経要集』の異称である可能性も否定はでき

ない。『法苑珠林』と『諸経要集』はいずれも道世の選と考えられているもので、同文的同話が多く含まれている。事実、『諸経要集』巻二敬法篇第二聴法縁第三には、この鸚鵡の話が収められている。そこで、今問題となっている説話の部分に関して、敦煌本Fと『孔雀経音義』、『法苑珠林』、『諸経要集』を比較してみたい。

敦煌本F	孔雀経音義	諸経要集(23)	法苑珠林(24)
昔仏在世時、舍衛国中、須長者、信敬仏法、為僧壇越、衆僧所須、一切供給。須達家中有二鸚鵡。一名律捉、二名兩律提。稟性黠慧、解人言語。比丘見来、先報家内令出丞迎。阿難後時、到長者家。見鳥聡明、為説四諦、苦集滅道。門前有樹、二鳥聞法。飛向樹上、歓喜誦持。夜在樹宿、野狸所食。縁此善根、生四王天忉利天等。	昔仏在世時、舍衛国中、須達長者、信敬仏法、為僧檀越、衆僧所須、一切供給。須達家有二鸚鵡。一名健提、二名健律提。稟性黠慧、解人言語。見此丘来□、先家内令出迎告。阿難後時、到長者家。見鳥聡黠、為説四諦、集滅道。門前有樹、二鳥聞法。飛向樹上、歓喜誦持。夜在樹宿、野狸所食。縁此善根、生四天王。尽形寿以生忉利天。忉利天寿尽生夜摩天。夜摩寿尽生兜率天。兜率寿尽生化楽天。化楽寿尽生於第六他化自在。他化寿尽還生化	昔仏在世時、舍衛国中、須達長者、信敬仏法、為僧檀越、彼僧所須、一切供給。須達家内有二鸚鵡。一名律提、二名兩律提。稟性黠慧、解人言語。見比丘来、先告家内令出迎逆。阿難後時、到長者家。見鳥聡黠、為説四諦、苦集滅道。門前有樹、二鳥聞法。飛向樹上、歓喜誦持。夜在樹宿、野狸所食。縁此善根、生四天王天。盡彼天寿盡生夜摩天。夜摩寿盡生兜率天。兜率寿盡生化楽天。化楽寿盡生於第六他化自在天。他化寿盡還	昔仏在世時、舍衛国中、須達長者、信敬仏法、為僧檀越、衆僧所須、一切供給。須達家内有二鸚鵡。一名律提、二名兩律提。稟性黠慧、解人言語。見比丘来、先告家内令出迎逆。阿難後時、到長者家。見鳥聡黠、為説四諦、苦集滅道。門前有樹、二鳥聞法。飛向樹上、歓喜誦持。夜在樹宿。野狸所食。縁此善根生四天王。盡彼天寿生忉利天。忉利寿盡生夜摩天。夜摩寿盡生兜率天。兜率寿盡生化楽天。化楽寿盡生於第六他化自在天。他化寿盡還生化楽。

如是七返受天已畢。	楽。如是次第還復下至四天王。天四天寿尽還復上至他化自在。	生化楽天。如是次第還復下至四天王天。四天寿盡還復上至他化自在天。	如是次第還復下至四天王天。四天寿盡還復上至他化自在天。
来生人中、出家修道、得壁支仏果。一名曇摩、二名修曇摩。	如是上下逕於七返。生六俗天、自恣受楽、極天之寿而無中夭。後時命終来生人中、出家修道、得闢支仏。一名曇摩、二名修曇摩。	如是上下経於七返。生六欲天、自恣受楽、六天之寿而無中夭。後時命終來生人中、出家修道、得辟支仏。一名曇摩、二名修曇摩	如是上下経於七返。生六欲天、自恣受楽、極天之寿而無中夭。後時命終來生人中、出家修道、得辟支仏。一名曇摩、二名修曇摩。

これを見ると、『孔雀経音義』の引く本文は、敦煌本Fよりもむしろ『法苑珠林』や『諸経要集』に近い。そういう意味では今野氏の言うように、「衆経要集二巻」というのは『諸経要集』巻二のことであるのかもしれない。

ただし、敦煌本Fが他の本と違うのは説話の後半部であるが、その部分も『法苑珠林』や『諸経要集』の本文と離れているわけではない。後半で大きく省略されているのは、鸚鵡がさまざまな天に転生したという部分である。『孔雀経音義』と『法苑珠林』、『諸経要集』では、傍線部のように転生した天の名前が全て挙げられているのに対し、敦煌本Fでは「忉利天等」と簡略になっている。本来は『孔雀経音義』が引くような『法苑珠林』などと同文的同話であったものを、引用する際に、筋に大きく関わらない、いささかくどいと思われるような記述を簡略化して引いたのが敦煌本Fの記述だと考えることもできるのではないか。

また、経録などをみても、道世の『諸経要集』二十巻を「衆経要集」と表記しているものは目下未見である。逆に、『金蔵論』のことを『衆経要集』としている例は随所に見られる。例えば、正倉院文書[25]、永超撰『東域伝灯目録』雑述録三[26]、七寺蔵『一切経論律章疏集伝録并私記』巻上[27]・法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目録』下巻[28]・『山王院蔵書

目録[29]』には、いずれも「衆経要集七巻」とあり、これが『金蔵論』のことだと考えられる。少なくとも日本では、『金蔵論』の呼称として「衆経要集」という呼称が一般的であったということになろう。

断定はつつしまねばならないが、『孔雀経音義』のいう「衆経要集」は、文字通り『衆経要集』、すなわち『金蔵論』を指している可能性も否定できないのではないか。仮にこれが『金蔵論』のことだとすると、「衆経要集二巻云」とあることから、『金蔵論』の巻二に、この鸚鵡の話が収められていたということになる。つまり、鸚鵡の話を含む敦煌本Fの三話は、『金蔵論』巻二の逸文であるということになるのである。この三話は話形から考えて「聴法縁」あるいは「聞法縁」と名付けられた章に収められていたであろうことが推測できる。[30]『金蔵論』巻二は、谷大本のような形ではなく、「聴法／聞法縁」という章を含む巻であった可能性を指摘しておきたい。

（七）おわりに

以上、まず谷大本『金蔵論』巻二が形式や本文系統の点で他の巻に比して異質であることを検証した。さらに、敦煌本Eが谷大本『金蔵論』巻二所収話と異系統の同話を引くことから、谷大本『金蔵論』巻二が『金蔵論』ではないという可能性を導き出した。今後『金蔵論』を研究していく上では、この谷大本『金蔵論』巻二については慎重に扱うことが必要であろう。

それでは谷大本『金蔵論』巻二はいったいなぜ現在のような形なのか。これに関しては何か異質のもの、おそらくは『経律異相』の抄出本のようなものが、何らかの理由で鼠入したとしか考えられないが、その事情については不明としかいいようがない。ただ、それを考える上で示唆的なのが、京戸慈光氏によって紹介されたペリオ二一六三である。[31]京戸氏はこの本と『諸経要集』との詳細な比較を行い、これが『諸経要集』の抄出本であることを明らかにさ

れた。この本の末尾に本文とは別筆の「金蔵論」という文字がみえる。[32] この文字を書き付けた人物は、この『諸経要集』抄出本を『金蔵論』と認識し、この文字を書き入れたと考えられるのである。

「衆経」の「要」を撰「集」するという行為は、古くは梁の『衆経要抄』などから脈々と行われてきた。仏教の類書ともいうべきこういった書物は、現在見ることができるものでは『経律異相』、『諸経要集』、『法苑珠林』などが知られているが、既に散逸してしまったものもあると考えられている。これらはその構成や分量などに差はあるとはいえ、形式としては、章を立て、その下に仏典からの引用を列挙するという点で一致する。この『諸経要集』抄出本もその形式になるものであるが、形式の類似から『金蔵論』と誤って認識されたという可能性もあるのではないか。ペリオ本二一六三には「開元廿有三載（七三五）」という本文と同筆とみられる書写奥書が付されているので、「金蔵論」という文字が書き入れられたのは少なくともそれ以降のこととなる。この誤認が行われたころには、『衆経要集金蔵論』が、「衆経」の「要」を撰「集」したものであるという認識が広く行われていたということになる。さまざまな章（主題）ごとに仏書からの引用をあつめたものの代名詞として、『金蔵論』が考えられていた、つまり『金蔵論』の知名度がそれだけ高かったということになろう。

もしこの仮定が正しいとすれば、それは同様に『経律異相』の抄出本にもいえるのではないか。仏典からの抄出という点で『金蔵論』と類似した『経律異相』抄出本が、ある時点で誤って『金蔵論』と認識され、それが巻二として鼠入したという可能性も考えられるのではないか。

以上、谷大本『金蔵論』巻二の問題を、新出の敦煌本と関連させて考察してきた。谷大本巻二が他の巻に比して異質であることは間違いなく、本稿ではそれを裏付けるべく推論を重ねてきた。あくまで推測にすぎないが、本来の巻二が「聴法／聞法縁」を含むものであったという可能性も提示した。今後は敦煌本の出現で明らかになった部分を手

がかりに、可能なかぎり『金蔵論』の姿を復元し、その意義づけを行ってゆきたい。

ただし、道紀が撰んだ『金蔵論』の本来的な姿と、日本で享受された『金蔵論』の姿とは、必ずしも一致しないという可能性もある。谷大本の巻一と巻二は、一続きに書写されており、書写者は現在の巻二を『金蔵論』と考えていたことが明らかだからである。谷大本の書写された長承三年（一一三四）には、谷大本巻二はすでに現在のような形だったのである。今後『今昔物語集』をはじめとする日本での『金蔵論』受容を考える中では、谷大本のような形式、つまり巻二に異質のものが混入した形での『金蔵論』本文も視野に入れた上で考えていかなければならないであろう。

中国では長く散逸したと考えられていた『金蔵論』は、敦煌で密かにその生を保っていた。この敦煌本の出現により、新たに判明した説話数は、巻が判明しているものが二十四話、不明のもの（逸文を含む）が六話である。興味深いのは、今回発見された敦煌本のほとんどが巻五と巻六であるという点である。この偏った残存状況こそが、『金蔵論』の享受を考える上で重要な手がかりとなるのではないだろうか。今後は『金蔵論』の復元作業とともに、『金蔵論』の中国における影響、特に後代の仏教類書との関係や唱導における利用、さらには日本における影響などに関してもさらなる考察が必要であるが、それらに関しては後日を期すこととする。

註

（1）道紀の伝については宮井里佳「道紀伝について――中国仏教の類書の研究の基礎作業として」（『埼玉工業大学人間社会学部紀要』一、平成十五年二月）がある。

（2）荒見泰史「敦煌文学与日本説話文学――新発現北京本《衆経要集金蔵論》的価値」（『仏教文学研究論集』復旦大学出版社、二〇〇四年）。

（3）一本は大屋徳城「興福寺本日本国現報善悪霊異記　解説」（法隆寺塔中実相院佐伯良謙編『日本国現報善悪霊異記』上、便利堂、昭和九年）で言及される本であるが、現在所在不明。もう一本は京都大学附属図書館所蔵の谷大本の忠実な写本。

山路芳範氏に翻刻がある（「京都大学附属図書館所蔵本『衆経要集金蔵論』巻一」『仏教学会紀要』第七号、平成十一年・「京都大学附属図書館所蔵本『衆経要集金蔵論』巻二」『仏教学会紀要』第九号、平成十二年）。

（4）荒見氏前掲論文。

（5）北京八四〇七・スタイン四六五四・ペリオ三四二六の三本は荒見氏論文、北京一三三二は、方廣錩氏の教示による。それ以外は平成十七年八月に落合俊典氏・宮井里佳氏とともに大英図書館等にて調査を行い判明。

（6）詳細は別稿で紹介予定。

（7）興福寺本と敦煌本では説話配列が異なる巻があり、この文章は興福寺本では堅誓師子敬著袈裟人得報縁の話末に位置する。どちらが本来的であるかについては要検討。

（8）『金蔵論』の引用は、巻一・巻二は谷大本に、巻五・巻六は敦煌本Ａによる。引用に際しては、私に句読点を施し、旧字は通行の字体に改めた。破損等により判読不能な部分は〔　〕で括って示した。

（9）『続高僧伝』巻第三十　雑科声徳編第十　高齊鄴下沙門釈道紀伝二（大正新修大蔵経五十、七〇一頁）。

（10）大正新修大蔵経五三、一頁。

（11）『金蔵論』と『法苑珠林』の関係については、検討が必要であるが、目下の所『法苑珠林』が『金蔵論』を参照しているというより、両者が共通して拠った共通祖本のようなものの存在を想定するべきかと考えている。

（12）『経律異相』巻第十八　声聞無学第六　僧部第七　華天先世採花供養今天雨其花五（大正新修大蔵経五三、九五頁）。

（13）『賢愚経』巻第二　華天因縁品第十（大正新修大蔵経四、三五九頁）。

（14）山路芳範「『義楚六帖』引用典籍考三：『金蔵経』（衆経要集金蔵論）について」（『印度学仏教学研究』四二巻二号、平成六年）。

（15）『金蔵論』の説話標題・出典注記は、この形式が大部分であるが、敦煌本にはこれ以外の形式をもつものもある。

（16）『法苑珠林』巻第四十七　懲過篇第四十六　引證部第二（大正新修大蔵経五十三、六四三頁）。

（17）『経律異相』巻第四十　梵志部　梵志兄弟四人同日命終九（大正新修大蔵経五十三、二一三頁）。

（18）大正新修大蔵経四、六一九頁。

（19）ただし、現存『法句譬喩経』では本話は巻第一に収められている（大正新修大蔵経四、五七六頁）。

(20) 大正新修大蔵経八十五（一二〇四頁）に「諸経要略文」として収録。
(21) 新日本古典文学大系『今昔物語集』一「出典考証の栞」（今野達校注、岩波書店、平成十一年）。
(22) 大正新修大蔵経六十一、八〇五頁。
(23) 『諸経要集』巻第二 敬法篇第二 聴法縁第三（大正新修大蔵経五十四、一一頁）
(24) 『法苑珠林』巻第十七 敬法篇第七 聴法部第二（大正新修大蔵経五十三、四一二頁）。
(25) 正倉院文書『写疏所解』天平十九年六月七日（七四七）（『大日本古文書』九）。
(26) 大正新修大蔵経五十五、一一六四頁。
(27) 牧田諦亮監修・落合俊典編『七寺古逸経典研究叢書』六（大東出版社、平成十年）。
(28) 前掲注二十七。
(29) 佐藤哲英『山王院蔵書目録』翻刻（『叡山学報』第十三輯、昭和十二年）。
(30) これは『法苑珠林』との比較からも推測できる。詳細は別稿を予定。
(31) 京戸慈光「国府牒における金蔵論について」（平成十六年五月、叡山学会における口頭発表）。
(32) 「金蔵論（本文と別筆ヵ） 維開元廿有三載（七三五）於幽州写記之（同筆ヵ）王庭与呂蘭師兄勘校訖（別筆ヵ）」

[付記]
・谷大本巻二の問題点は、落合俊典氏を中心に数年来行ってきた金蔵論研究会での輪読作業の中で浮かび上がってきたものです。研究会の成果を利用させていただいたことを特記するとともに、研究会員の皆様にお礼申し上げます。
・本稿は平安京文化研究会（平成十七年十二月十一日於神戸市立六甲道勤労市民センター）における口頭発表に基づくものです。席上貴重なご指摘を賜りました諸先生方に記してお礼申し上げます。
・本稿は平成十七年度科学研究費〔基盤研究（C）〕「中国北朝後半期の仏教の類書『金蔵論』の研究」（研究代表者 宮井里佳）の成果の一部です。

『衆経要集金蔵論』同話一覧

・巻一・二は大谷大学蔵本により、巻五・六は敦煌本Aによった。
・説話番号は私に付した。
・破損等により不明な部分に関しては、推定されるものを（　）で括って仮に示した。
・『経律異相』・『法苑珠林』の同話については、同文的同話は□で、部分的に一致するものは▨で示した。
・『義楚六帖』は東福寺蔵宋版本（『禅学典籍叢刊』第六巻下、臨川書店、平成十三年）によった。

巻	縁	説話番号	説話標題	経律異相 巻	経律異相 話	経律異相 部	法苑珠林 巻	法苑珠林 篇	法苑珠林 部	法苑珠林 部	義楚六帖	義楚六帖 帖	義楚六帖 部
1		序											
	邪見縁第一	述意					79	十悪	84	邪見	13		
		①	迦葉為婢肆王説邪見過悪譬喩縁				79	十悪	84	邪見	13	引證	2	述意	1	不来如厠	6	寺舎塔殿	44	厠	13
		②	須達家老婢過去起邪見得悪報縁	23	9	声聞無学尼	79	十悪	84	邪見	13	引證	2								
		③	邪見毀滅三宝得悪報縁			僧	12	79	十悪	84	邪見	13	引證	2								
	殺害縁第二	述意						70	受報	79	悪報	11										
		①	釈種過去殺魚今為流離王所滅縁																			
		②	迦留陀夷等過去殺羊得悪報縁	15	7	声聞無学	3	73	十悪	84	殺生	4	引證	2	羊被截足	6	師子獸類	50	羊	9		
		③	毘舎離三十二子過去牛殺得悪報縁	36	18	雑行		僧	4	長者下												
		④	微妙過去妬殺小婦子得悪報縁					73	十悪	84	殺生	4	引證	2	共殺之報	6	師子獸類	50	牛	8		
		⑤	宿大哆過去殺辟支仏得悪報縁					58	謀謗	67	呪詛	2			針兒致死	6	助道資身	46	針	24		
		⑥	師質過去斫辟支仏臂得悪報縁					84	六度	85	禅定	5	引證	2								
		⑦	駒那羅過去壊鹿眼得悪報縁					64	漁猟	73	引證	2										
								91	賞罰	91	引證	2			食糞之疾	1	損悩有情	4	病	4		
															金瓶之印	6	武備安邦	47	印	1		
															壊目之縁	6	師子獸類	50	鹿	4		

巻	説話番号	説話標題	経律異相 巻	経律異相 話	経律異相 部	法苑珠林 巻	法苑珠林 篇	法苑珠林 部	義楚六帖 部
2	①	好信王発欲灌仏縁	28	7	行声聞道諸国王5				
	②	国王夫人与一賢者共造寺縁	30	6	諸国王夫人				
	③	以欝衣石布施人起塔生天縁	36	15	雑行				
	④	有人路行過見三受身行進縁	37	13		優婆塞			
	⑤	優婆塞持戒鬼代花縁	37	2		優婆塞			
	⑥	難陀燃灯声聞神力不能滅縁	38	8		優婆塞	35 燃灯31 引證2		
	⑦	梵志諸施比丘説一偈能消縁	40	6		梵志			
	⑧	梵志遠学値五無反復縁	40	8		梵志			
	⑨	梵志兄弟四人同日命終縁	40	9		梵志	47 懲過46 引證2		
	⑩	長生太子欲報父怨後還得恩縁	32	3	行菩薩道	諸国太子			
	⑪	為国王身治梵志罪縁	11	10	隨記現身下	菩薩3			
	⑫	優填王造牛頭梅檀像縁	6	1	現涅槃後事	仏3			
	⑬	優填王造金像縁	6	2	現涅槃後事	仏3			
	⑭	波斯匿王造牛頭梅檀像縁	6	4	現涅槃後事	仏3			
	⑮	阿那律等共仏跋提長者及其婦縁	13	15	声聞無学1	僧2	77 十悪84 慳貪11 引證2		
	⑯	目連為母造盆縁	14	11	声聞無学2	僧2			
	⑰	童子迦葉従尼所産一歳成道縁	16	9	声聞無学4	僧5			
	⑱	願足羅漢化餓鬼説法昔悪口縁	16	14	声聞無学4	僧5	76 十悪84 悪口8 引證2		
	⑲	四比丘説苦遇仏得道縁	18	12	声聞無学6	僧7			
	⑳	比丘自恣受臘得道縁	18	17	声聞無学6	僧7			
	㉑	仏楽宿習得道縁	18	18	声聞無学6	僧7			
	㉒	比丘久病仏為浴浣縁	18	21	声聞無学6	僧7			
	㉓	道人度狐師縁	19	24	声聞不測浅深	僧8			
	㉔	調達与仏結怨之始縁	21	1	声聞現行悪行	僧10			
	㉕	暴志比丘尼前身為繁婦縁	24	13	転輪聖王	諸国王1			

巻	縁	説話番号	説話標題	経律異相 巻	経律異相 話	経律異相 部	法苑珠林 巻	法苑珠林 篇	法苑珠林 部	法苑珠林 部	義楚六帖 帖	義楚六帖 部
5	〔塔縁〕第十五	（1）	〔迦羅越四人同共造塔得報縁〕	6	6	仏部3	37	敬塔35	感福4		獼猴學僧	6 寺舎塔殿44 塔3
		（2）	金地国王過去治故塔得報縁	36	3	現涅槃後事					金地同縁	6 寺舎塔殿44 塔3
		（3）	蘇曼女女十子過去治故塔得報縁	27	3	雑行					治塔同生	6 寺舎塔殿44 塔3
		（4）	金色過去治故塔得金色身縁	38	3	行声聞道上					児生金色	6 寺舎塔殿44 塔3
		（5）	婆多竭梨過去掃塔得報縁					38 敬塔35	故塔6		生天道福	6 寺舎塔殿44 塔3
		（6）	功徳意掃塔香燈供養得生天縁								被殺天生	4 后妃公主31 官人3
		（7）	婦憶夫掃治塔寺得生天縁					38 敬塔35	故塔6		掃塔生天	6 寺舎塔殿44 塔3
		（8）	老比丘由掃塔得道縁					38 敬塔35	故塔6		掃塔生天	6 寺舎塔殿44 塔3
		（9）	宝手過去金銭着塔下得報縁					37 敬塔35	感福4		宝手金銭	6 寺舎塔殿44 塔3
	像縁第十六	述意	なし									
		①	若人作仏像得報縁					33 興福27	修造5			
		②	難陀過去作辟支仏像得報縁					33 興福27	修造5			
		③	迦葉夫婦過去金薄像面得報縁	13	3	声聞無学1		33 興福27	修造5			
		④	燈指過去治像指得報縁					35 然燈31	引證2			
		⑤	象護過去治塔白象得報縁					31 潜通23	引證2			
	香花縁第十七	述意	なし									
		①	旃檀香過去塗塔地得報縁					36 華香33	引證2			
		②	同邑百人過去香花供養塔得報縁					36 富貴63	引證2		百同造塔	6 寺舎塔殿44 塔3
		③	薗藍持王花散仏得授記縁									
		④	華天過去以花散僧得報縁	18	5	声聞無学6						
		⑤	威徳過去仏塔中萎花鹿得報縁			僧7						
	燈縁第十八	述意	なし									
		①	聖友共牟尼燃燈供養仏得成仏縁					35 然燈31	引證2			
		②	貧女難陀燃燈供養仏得授記縁					35 然燈31	引證2			
		③	女人塔中燃燈供養得生天縁									
		④	阿那律過去正仏前燈得天眼縁	13	13	声聞無学1		35 然燈31	引證2			

巻	縁	説話番号	説話標題	経律異相 巻	経律異相 話	経律異相 部	法苑珠林 巻	法苑珠林 篇	法苑珠林 部	義楚六帖 帖	義楚六帖 部
6	幡蓋縁第十九	① 述意	なし								
		①	波多迦過去造幡懸塔上得報縁				36	懸幡32	引證2		長幡在頂
		②	放羊人以草蓋覆仏得報縁				36	懸幡32	引證2	6	助道資身46
		③	宝蓋過去以覆仏塔得報縁				37	敬塔35	感福4		草蓋勝報6
		④	善化王以蓋覆辟支仏廟得報縁								武備安邦47
	出家縁第廿	① 述意	なし								蓋12
		①	障人出家得悪報縁				22	入道13	引證4		
		②	在家過悪出家功徳縁				22	入道13	欣厭2		烏障出家
		③	福増年老出家得道縁				21	士女12	俗男1		蟲生自尸
		④	優陀羨王婦一日出家得生天縁				22	入道13	引證4		龍王水族48
		⑤	鞞瘃擲洴俠泓忼優罷揎樑倍				22	入道13	引證4		蟲蟻9
	袈裟縁第廿一	① 述意							勧導3		
		①	袈裟有五功徳縁				35	法服30	功能2		一日生天2
		②	龍著袈裟得勉金翅鳥食縁				35	法服30	功能2		大士僧伽6
		③	堅誓師子敬著袈裟人得報縁				35	法服30	済雑4		出家5
		④	打罵著袈裟人得罪報縁				35	法服30	違損6	6	不得不敬
	孝養廿二	① 述意					35	法服30			助道資身46
		①	鸚鵡孝養盲父母得成仏縁				49	忠孝49	引證2		袈裟2
		②	須闍提太子身肉供養父母得成仏縁				49	忠孝49	太子3	6	孝養取穀
		③	慈童女孝養得現報縁				49	忠孝49	業因5		金翅羽族49
		④	失恩者得現報縁	11	8	菩薩4	50	背恩52	引證2		鸚鵡5
	敦煌本E		比丘財乞丐作福得報縁		随喜見身下						
			四梵志避死得脱縁								
			厭三界五道受苦勧生浄土縁				33	興福27	生信3		
							33	懲過46	引證2		持戒座禅1
	敦煌本F		蛤聽法得生天縁	48			17	敬法7	聽法2		蛤乗宮殿6
			鳥聞比丘誦経得生天縁	1			17	敬法7	聽法2		龍王水族48
			鸚鵡聞説四諦得生天縁	蛤5		蟲畜生下	17	敬法7	聽法2		蛤5
											六到彼岸5
											持戒2
											鸚鵡5
											鸚鵡聞法6
											金翅羽族49

（本学任期制助手　国文学）

〈キーワード〉敦煌本、法苑珠林、義楚六帖